

別表3 幼児健診問診項目の意味と対応（P8、9、12 関連）

別表3-① 幼児健診問診項目の意味と対応 1歳6か月児健康診査

問診項目（問診目的）	確認・観察ポイント
<p>「ママ、ブーブーなど意味のあることばを話しますか」 （ことばの発達状況の把握）</p>	<p>意味のある発語があるか。ことばの理解ができているか。 ことばの準備段階を確認する。</p> <p>①発声：人や物に向かって声をよく出しているか。 ②聴覚：音がした時の反応があるか。 ③言語理解：大人の言うことや指示が理解できているか。 （「〇〇をとって」を理解しているか。） ④呼名反応：名前を呼ばれると振り向くか。 ⑤指さし：質問をされて答える時、欲しい物を伝える時、母親等と何かを媒体にやりとりする時、指さしがみられるか。 ⑥大人への信頼：大人と一緒に遊びたがったり、手助けを求めて、目を合わせたりするか。 ⑦模倣：身振りや声をまねるか。</p>
<p>「お母さんが部屋の中の離れたところにあるおもちゃを指さすと、そちらの方を見ますか」 （共同注意行動の把握）</p>	<p>共同注意（視線や指さしなどの非言語的手段を使って、保護者と同じ対象に注意を向け、情報や感情を共有する）がみられるか。 コミュニケーションの状況を確認する。</p> <p>①本人との意思疎通をどのようにしているか。 ②視線が合うか。 ③心のつながり、意思疎通ができていると感じているか。</p> <p>※発達障害の場合は、自分からの働きかけが弱く、周囲からの働きかけへの反応が薄い場合があります。</p>
<p>「お母さんのまねをしますか」 （模倣の把握）</p>	<p>模倣をするか。 どのような模倣をしているか確認する。</p> <p>①物の操作などの真似（テレビをつける時にリモコンを押す）をするか。 ②手遊び、ビデオやCMなどの真似をするか。 ③エコラリア（オウム返し）をするか。</p> <p>※発達障害の場合は、他の発語に比べオウム返しやビデオ、CMのフレーズの真似をすることが多い場合があります。</p>

対応方法（発達障害だと思われる場合）

ことばを育むかかわり方を助言し、経過観察または遊びの教室等に誘い、継続的に支援する。

助言内容

- ・コミュニケーションを伸ばすには、人との情報をやりとりすることの楽しさ・便利さ・必要性について気づくことが大切である。
- ・確実に使えるコミュニケーションの手段を持つことが大切であるから、話しことばにこだわりすぎず、身振りやジェスチャー、指さし、実物を示すなどを活用する。
- ・分かりやすい短いことばでゆったりと話しかける。
- ・発音が間違っている場合でも否定せずに、伝えたい気持ちを受け止め、正しい発音で反復してあげる（お手本を示す）。
- ・決まった場面で繰り返される挨拶を一緒にしていく。

保護者のかかわり方について助言し、経過観察または遊びの教室等に誘い、継続的に支援する。

助言内容

- ・他者に促されて同一のものを見たり、視線を合わせたりすることが難しい場合がある。
- ・子どもが興味、関心を持っていることに寄り添いながら、傍らで並行的にかかわることから始める。
- ・今行っている遊びを少しずつ広げていく。
- ・無理に視線を合わせることを求めないようにする。
- ・ことばのみに頼らず、視覚的手がかりを加えて、本人に分かりやすく伝える。
- ・余計な情報を伝えないようにする。

助言内容

- ・エコラリア（オウム返し）は、その子どもなりのコミュニケーションの努力の姿である。
- ・ことばの発達の1つの段階としてとらえ、無理にやめさせる必要はなく積極的に反応していく。
- ・意味の理解や状況の理解の弱さからあらわれているので、意味や状況をより分かりやすく伝える工夫をする必要があるという子どもからのメッセージであると受け取る。

保護者が一方的に多く話しかけている場合

- ・子どもの分かりやすい短いことばでゆったりと丁寧に話しかける。
- ・子どもの反応を待つ。
- ・話しかけないということではなく、ことばかけを整理することで本人の混乱を軽減する。

別表3 幼児健診問診項目の意味と対応（P8、9、12 関連）

別表3-① 幼児健診問診項目の意味と対応 1歳6か月児健康診査

問診項目（問診目的）	確認・観察ポイント
<p>「他の子どもに関心を示しますか」 「お母さんの注意を自分の方に惹こうとしますか」 （他児への関心・注意喚起の把握）</p>	<p>他者への関心があるか。保護者への注意喚起があるか。 他者へのかかわり方の状況を確認する。 ①人とかかわり合うことを楽しむか。 ②何に興味を持っているか。人とのかかわりより、物の刺激（感覚的な遊び）を好むか。</p> <p>※発達障害の場合は、一人でいることや感覚的な遊びをより好む場合があります。</p>
<p>「何か怖いことがあると、お母さんなどなじみの人にしがみつきますか。抱かれると安心しているようですか」 「親から平気で離れてしまうことがありますか」 （愛着行動の把握）</p>	<p>何か不安に襲われた時、なじみの人にしがみついたり、後を追ったりして、心身の安全を確保することができるか。 初めての場所や健診場面での様子を確認する。 ①母親の周りにいるか。 ②母親から離れていくが、呼ばれると振り向くか、または母親の位置を確認するか。</p> <p>※発達障害の場合は、相互的にかかわりが難しいため、愛着関係が築きにくい場合があります。</p>
<p>「落ち着かない、不注意でよく転ぶ、平気で高いところに登るなど行動面で何か気がかりなことはありますか」 （多動性などの行動特徴の把握）</p>	<p>子どもの多動性、衝動性、不注意などの行動特徴について確認する。 保護者側の要因（かかわり方、虐待など）によるものではなく、子ども側の要因によるものであるかを確認する。 多動性 ①目的を持って動いているか。 ②保護者がいることを確認しながら、動き回っているか。 ③常に手をつないでいないと外出できないほど動き回っていたり、道路に飛び出したり、迷子になったりするか。</p>
<p>「育児を楽しんでいますか」 「育児は疲れたと感じることがありますか」 「子育てに心配や困っていることはありますか」 （育てにくさ）</p>	<p>親が感じる育てにくさ・育児不安・育児疲労感・他の子とは違うと感じている違和感等、親が感じている思いを丁寧に聴く。 保護者側の要因（疾患や障害等）によるものではなく、子ども側の要因によるものであるかを確認する。</p> <p>※発達障害の場合は、人とのかかわりにおいて意思の疎通が感じられにくいために、保護者が違和感や心のつながりを感じにくい場合があります。</p>

対応方法（発達障害だと思われる場合）

保護者のかかわり方について助言し、経過観察または遊びの教室等に誘い、継続的に支援する。

助言内容

- コミュニケーションを伸ばすには、人との情報をやりとりすることの楽しさ・便利さ・必要性について気づくことが大切である。
- 子どもが興味・関心を持っていることに寄り添いながら、傍らで並行的にかかわることから始める。

保護者のかかわり方に問題があるためではなく、親子間であっても、コミュニケーションをとりやすく、心のつながりを感じにくい場合があることを伝える。

助言内容

- どのような場面で落ち着きがなくなるか観察する。
- 子どもを駆り立てるような刺激を減らす工夫をする。（家庭内の整理整頓など）
- 子どもがとるべき行動が分からず混乱しないように、理解できる指示をする。
- 見通しが分からず不安を与えないように、見通しを持たせる。
- 注意の集中が継続しやすいように、子どもが理解できるレベルに課題を合わせる。

保護者の訴えを十分聴き、受け止める。

保護者の育て方やかかわり方の問題ではなく、相手の気持ちを読み取ることが苦手なために、そのかかわりがうまくとれずにいる子であることを伝える。

子どもの行動に対して、具体的なかかわり方について助言する。

（各対応方法を参考にしてください。）

別表3 幼児健診問診項目の意味と対応 (P8、9、12 関連)

別表3- ① 幼児健診問診項目の意味と対応 1歳6か月児健康診査

問診項目 (問診目的)	確認・観察ポイント
<p>「特定の音や匂いや感触などに過敏・鈍感に反応しますか」 「睡眠時間、1日の生活リズム、偏食や食べ方など生活習慣で困っていることはありますか」 (感覚の特異性の把握)</p>	<p>感覚の特異性があるか。 触覚・痛覚、温度覚、嗅覚、味覚、視覚、聴覚、前庭感覚・固有感覚について確認する。</p> <p>①触覚・痛覚 過敏性：触られるのを嫌がる、手を繋ぎたがらない、服や靴下を着たがらない、特定の服しか着ない、濡れるのを嫌がる、粘土に触りたがらない、普通痛いと思わない物(歯ブラシ、ブラシなど)で痛がる。 鈍麻性：触られても気づかない、転んでも痛がらない、擦り傷が絶えない、自傷行為がある。</p> <p>②温度覚 過敏性：暑い・寒いと異常にイライラする、嫌がる。 鈍麻性：やけどしそうなくらい熱くても食べようとする。</p> <p>③嗅覚 過敏性：特定の匂いを嫌がる、シャンプーや石鹸などが嫌いで洗わない。 鈍麻性：異臭・悪臭でも気にしない。</p> <p>④味覚 過敏性：偏食、味が無いものしか食べない、特定の食感を嫌がる。 鈍麻性：刺激の強いもの(辛い、酸っぱい、塩辛いなど)を好む。</p> <p>⑤視覚 過敏性：特定の色が強く感じられる、蛍光灯が気になる、眩しがる。 鈍麻性：目の端で物を見る、キラキラ光るものや回る物に没頭する。</p> <p>⑥聴覚 過敏性：特定の音(救急車のサイレン、トイレを流す音、ファンヒーターなど)に耳をふさぐ、少しでも雑音があると極端に人の話が聞けなくなる。 鈍麻性：呼びかけても反応しない。</p> <p>⑦前庭感覚・固有感覚 (次頁参照) 過敏性：急にスピードや方向を変えるのが難しい、足が地上から離れるのを怖がる。 鈍麻性：回る遊具に乗っても目が回らない、人によくぶつかる、いつもだらしない姿勢になる。</p> <p>⑧睡眠リズム：入眠時間が一定しない、夜中にたびたび目覚める。</p> <p>※発達障害の場合は、感覚の特異性がある場合があります。</p>

対応方法（発達障害だと思われる場合）

助言内容

- 感覚の特異性は、一人ひとり種類や程度は異なる。
- 子どもは、自分が苦手なものを保護者に伝えることは難しいので、保護者が観察して見極める。
- 成長に伴い感覚が育ってきて、問題にならなくなることも多いが、時間がかかる。
- 子どもが苦手なものを、無理強いしないように注意する。
- 子どもが苦手なものや不安の原因を、できる範囲内で軽減する。
- 前庭感覚や固有感覚については、感覚統合を促す遊びを日常生活に多く取り入れる。
(53～56 頁「感覚統合を促す遊び」を参考にしてください。)

※前庭感覚：主に重力と関係する感覚的な動きです。あやす時の「高い・高い」や「抱っこして、クルクル回してあげる」、ブランコや滑り台、トランポリンなど、回転することや、ジャンプすること、高いところから低いところへなどの動きです。

前庭感覚が敏感だと、こういった動きや遊びを嫌がります。鈍感すぎると、必要以上に好んでしまい、特にクルクル回るなどの回転する動きに関しては、目が回らないという状況を感じます。

固有感覚：腹筋、背筋の運動または、自分の体や手足をどのようにうまく動かしていくのかに関係する感覚です。赤ちゃんの時期では、「はいはい」や「お座り」の動きと関係します。幼児期以降では、手押し車の運動や、鉄棒にぶら下がる、ジャングルジムやアスレチックなどの遊具で遊ぶ、荷物を持つ、荷物を背負う、姿勢良く座るなどにも関係してきます。

固有感覚は、鈍感が敏感かというよりも、自分の手足や体をうまくコントロールして運動することができるかということに関係しています。

別表3 幼児健診問診項目の意味と対応 (P8、9、12 関連)

別表3-② 幼児健診問診項目の意味と対応 3歳児健康診査

問診項目 (問診目的)	確認・観察ポイント
<p>「ことばによるやりとりで会話ができますか」 「2語文を話しますか」 「発音やことばで心配なことがありますか」 (ことばの発達状況の把握)</p>	<p>ことばによるやりとりができていないか。 ①発声：ことばの発達経過(発語時期、1歳6カ月児健診の時の状況)を確認する。 ②聴覚：耳の聞こえに問題はないか。(滲出性中耳炎など) ③環境：生活環境、育て方について把握する。 ④内容：ことば遣いや話題が偏っていないか。独特のイントネーションで話すか。 ※発達障害の場合は、2語文が話せていてもことばによるやりとりや場面に合った受け答えが難しい場合があります。</p>
<p>「どのような遊びをするのが好きですか」 (遊び・対人関係の把握)</p>	<p>遊び方にこだわりや偏りがないか確認する。 ①兄弟や友達とかかわり合って(同じ場所にいるだけではなく)遊ぶことを楽しんでいるか。 ②人とのかかわりより、物の刺激(感覚的な遊び)や、一人で遊ぶことを好むか。 ③見立て・つもり遊びやごっこ遊びをするか。 ※発達障害の場合は、一人でいることや感覚的な遊びをより好む場合があります。</p>
<p>「何か強くこだわるものや奇妙な行動がありますか」 (興味関心の偏り、行動特徴の把握)</p>	<p>こだわりや奇妙な行動があるか。 ※発達障害の場合は、想像性の障害から、いつもどおりであることを強く求めたり、感覚の特異性から奇妙な行動をしたりすることがあります。</p>
<p>「落ち着かない、不注意でよく転ぶ、平気で高いところに登るなど行動面で何か気がかりなことはありますか」 (多動性などの行動特徴の把握)</p>	<p>子どもの多動性、衝動性、不注意などの行動特性について確認する。 保護者側の要因(かかわり方、虐待など)によるものではなく、子ども側の要因によるものであるか確認する。 多動性 ①目的を持って動いているか。 ②保護者がいることを確認しながら、動き回っているか。 ③常に手をつないでいないと外出できないほど動き回っていたり、道路に飛び出したり、迷子になったりするか。</p>

対応方法（発達障害だと思われる場合）

ことばを育むかわり方を助言し、経過観察または遊びの教室等に誘い、継続的に支援する。コミュニケーションを伸ばすには、人と情報をやりとりすることの楽しさ・便利さ・必要性について気づくことが大切である。

助言内容

- 確実に使えるコミュニケーションの手段を持つことが大切であることから、話しことばだけにこだわりすぎず、身振りやジェスチャー、指さし、実物を示すことなどを活用する。
- 子どもに分かりやすい短いことばでゆったりと話しかける。
- 発音が間違っている場合、否定せず、伝えたい気持ちを受け止め、正しい発音で反復してあげる。
- 決まった場面で繰り返される挨拶を一緒にしていく。

保護者のかわり方について助言し、経過観察または遊びの教室等に誘い、継続的に支援する。他人の視点に立って物事を考える想像性に障害があるため、他人と遊べなかったり苦手である。いつも同じ遊びをするのは、興味の偏りと狭さによる。変化しないものにより、安心感を得ている場合もある。

助言内容

- 同じ遊びばかりをしてはいけないという考えをやめる。
- 子どもがどのようなことに興味があるのかを把握して、子どもが興味のある遊びに少しずつ広がりを持たせる。
- 一人ではできない保護者の助けが必要な遊びを活動に取り入れる。
- 他の取り組みやすそうな遊びを少しずつ増やしていく。

本人にとって見通しが立たない状況や、不快な刺激が多い場合に、強く出現することがある。こだわりや決めごとは、「いつもどおり」という安心感をもたらしている。そのため、不安な状況では、より強くこだわりが現れることがある。

助言内容

- こだわりや決めごとは、あってはいけないものではなく、家族や周囲が暮らしにくかったり、どんな時にも譲れないことが問題である。
- 子どもからのSOSのサインだと受け止め、本人にとって不快な刺激があればそれを把握し、可能な範囲において軽減する。
- こだわりをなくそうとするだけでなく、より適切なこだわりや決めごとに置き換えていく。
- 子どもが安心できる物や場所を把握しておく。

助言内容

- どのような刺激で落ち着きがなくなるかを確認する。
- 子どもを駆り立てるような刺激を軽減する工夫をする。（家庭内の整理整頓など）
- 何に対して集中できるのか把握し、プラスの行動を強化していく。
- 子どもがとるべき行動が分からず混乱しないように、見通しを持たせる。
- 集中しやすいように、子どもが理解できるレベルに課題を合わせる。
- 子どもが興味を持てるように課題を工夫する。

別表3 幼児健診問診項目の意味と対応 (P8、9、12 関連)

別表3- ② 幼児健診問診項目の意味と対応 3歳児健康診査

問診項目 (問診目的)	確認・観察ポイント
<p>「手のつけられないかんしゃく・パニックがありますか」 (行動特徴の把握)</p>	<p>パニック時の状況を把握する。 ①どのような場面でパニックを起こすのか。 ②その時の対応はどのようであったか。 ③どのような理由でパニックを起こすのか。 ④パニックを起こす前兆には、どのようなことがあるのか。 ⑤どのように対応したらおさまるのか。</p>
<p>「育児は楽しいですか」 「育児に疲れたと感じることがありますか」 「子育てに心配や困っていることはありますか」 (育てにくさ)</p>	<p>親が感じる育てにくさ・育児不安・育児疲労感・他の子とは違うと感じている違和感等、親が感じている思いを丁寧に聴く。 親側の要因 (疾患や障害等) によるものではなく、子ども側の要因によるものであるかを確認する。 ※発達障害の場合は、人とのかかわりにおいて意志の疎通が感じられにくいために、保護者が違和感や心のつながりを感じにくい場合があります。</p>
<p>「特定の音や匂いや感触などに過敏・鈍感に反応しますか」 「睡眠時間、1日の生活リズム、偏食や食べ方など生活習慣で困っていることはありますか」 (感覚の特異性の把握)</p>	<p>感覚の特異性があるか。 触覚・痛覚、温度覚、嗅覚、味覚、視覚、聴覚、前庭感覚・固有感覚について確認する。 (詳細については、1歳6か月児健診のページを参照)</p>

対応方法（発達障害だと思われる場合）

助言内容

パニックの最中及び直後の対応

- その場で叱ったり理由を聞いたりなだめたりせず、一声かけて別の場所に連れ出す。何も言わずに連れ出すとかえってパニックがひどくなることがある。
- パニックが治まるのを待って、穏やかに分かりやすく簡潔に声をかける。
- パニックの理由が答えられる場合は、本人なりの理由を確認する。
- 「順番なんだよ」「悔しかったね」等言い聞かせ、慰めや共感の言葉をかける。

パニック防止策

- 次にすることや起こることを、予定や関連物を見せるなどして、子どもに分かりやすく伝える。
- 「だめ」と禁止するのではなく、「これならいいよ。ここならいいよ。」というものを示すなど適切なふるまいや代替手段を具体的に伝える。
- 保護者との情報交換をおこない、パニックの原因を分析する。

保護者の訴えを十分聴き、受け止める。

保護者の育て方やかかわり方の問題ではなく、相手の気持ちを読みとることが苦手なために、そのかかわりがうまくとれずにいる子であることを伝える。

子どもの行動に対して、具体的なかかわり方について助言する。

（各対応方法を参考にしてください）

助言内容

- 感覚の特異性は、一人ひとり種類や程度は異なる。
- 子どもは、自分が苦手なものを保護者に伝えることは難しいので、保護者が観察して見極める。
- 成長に伴い感覚が育ってきて、問題にならなくなることも多いが、時間がかかる。
- 子どもが苦手なものを無理強いしないように注意する。
- 子どもが苦手なものや不安の原因を、できる範囲内で軽減する。
- 前庭感覚や固有感覚については、感覚統合を促す遊びを日常生活に多く取り入れる。
（53～56 頁「感覚統合を促す遊び」を参考にしてください。）